雁　雁（かり）

【原文・書き下し文】

1 南來北去不レ違レ時
2 先後自成二行列一之
3 塞上音書傳或詭
4 空中怪字寫何奇
5 秋江水濶天低遠
6 晩浦煙横月出遲
7 憐爾哀鳴投レ宿夜
8 白蘋花老雨如レ絲

南より来たりて北に去るに時を違えず
先後自ずから行列を成して之く
塞上の音書　伝えて或いは詭り
空中の怪字　写するは何ぞ奇なるや
秋江　水濶くして　天低く遠し
晩浦　煙横たわりて月出ずること遅し
憐むべし　爾　哀鳴して宿に投ずる夜
白蘋　花老いて　雨絲の如し

【平仄・詩型・押韻】○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

1○○●●●○◎
2○●○○○●◎
3●●○○○●●
4○○●●●○◎
5○○●●○○●
6●●○○●●◎
7○●○○○●●
8●○○●●○◎

七言律詩

『広韻』上平五支(奇)六脂(遲)七之(時・之・絲)同用。『平水韻』上平四支。

【校勘】

なし。

【現代語訳】

雁（かり）

北へ南へと渡るのは時節通りで、そのならびも自然と隊列を成して飛んで行く。
辺境の地からの便り（たよ）が届いたなどとは時に人を欺（あざむ）くためだったし、空に向かって書かれた不思

議な字というのもなんとも奇妙なことではないか。

秋の川は水がどこまでも広々として、空にはどこまでも雲が低く垂れ込めている。
夜の浦には靄がかかっているのでなかなか月はその姿をのぞかせない。
夜、悲しげに鳴いてねぐらに入るお前が哀れだ。水草は白い花がしおれ雨は糸となって降り続いている。

【解題】

この詩は、月性の初めての遊学先である豊前〔福岡県豊前市〕は恒遠醒窓の蔵春園での作。時に天保四年(癸巳 一八三三)秋、月性十七歳。

詩題に選ばれた「雁」は、古来、異郷に身を置く詩人たちが好んで詠んだ詩材である。このような動植物、或いは器物を詠む詩を詠物詩といい、詩の中に雁の字を用いることなく雁を想起させつつ、いかに作者の心情を詠むかが腕の見せ所となる。この詩は首聯(第一聯。第一句と第二句)で雁の渡りとその隊列である雁行を視野に収め、頷聯(第二聯。第三句と第四句)では雁と空に因んだ故事を連想させ、頸聯(第三聯。第五句と第六句)で凄涼な秋の昼と夕暮れの景色に詩人の寂寥たる思いを溶け込ませ、最後の尾聯(第四聯。第七句と第八句)では渡り鳥の雁に対して異郷をさすらう我が身を重ねて詠むという構成をなしている。ただ第四句の故事が雁とはやや距離のある用い方であったり、全体として作者である月性の個性が見えてこないという印象を受けるのは、実際に雁を目にしての実感というよりも、「雁」という詩題を与えられて作った塾の課題詩ということに起因しているのではなかろうか。

【語釈】

1・2 隊列を成して空を渡る雁の姿にもの悲しい秋の到来を感じさせる。 **1南來北去** 雁が北へ南へと渡る。『管子』「戒」に「鴻雁〔大きな雁〕春に北して秋に南して其の時を失せず(鴻雁春北而秋南而不失其時)」とあるように、雁は春には北へ、秋には南へと飛んでいくものであるので、ここも「南の方からから来て北の方へと去って行く」という意に受け取られがちだが、それぞれ「南」と「北」、「来」と「去」という対義語を用いて、「南へ北へと行ったり来たり」、さらには「あちらこちらへと行ったり来たり」という定めなくさすらう境遇をいう。唐、杜荀鶴「秋に臨江の駅〔宿場〕に宿る(秋宿臨江驛)」詩に「南より来たり北に去りて二三年、年去り年来たりて両鬢の斑〔耳際に混じる白髪〕(南來北去二三年、年去年來兩鬢斑)」。 **不違時** それぞれの時節にはずれるようなことはない。

2先後 前後の順序。 **自** 自然と。 **行列** 列を作って並んで飛ぶことで、いわゆる雁行。 **之** 行くこと。 **3・4** 雁と空に因んだ中国の故事を用いて時間的に空間的に詩に膨らみを持たせる。

3塞上音書 「塞上」は北の辺境の地、「音書」は手紙で、これらはいわゆる雁書の故事に基づく。

前漢の武帝の使者として敵対する北の匈奴に赴いた蘇武(紀元前一四〇?-紀元前六〇?)は抑留され帰順を強いられたがそれを拒み、羊飼いとして生き長らえること十九年に及んだ。その後、昭帝の即位後、匈奴と和睦を結ぶと、改めて蘇武の返還を求めたが、単于〔匈奴の王のこと〕は蘇武はもう死んでいると嘘をついた。しかし或る人の知略で長安に飛んできた雁の足に括られた手紙によってもたらされた知らせとして、蘇武は生きていると漢の使者が単于に鎌をかけたことで、やっとはじめて蘇武の健在を認め漢に帰還することができたという。そのあたりの経緯について、『漢書』巻五十四「李廣・蘇建伝附蘇武伝」に、「漢 武等を求むるも、匈奴 武は死せりと詭り言えり。後に漢使復た匈奴に至り、常恵〔共に囚われている者〕其の守る者〔看守〕と倶に、夜 漢使に見ゆるを得んことを請いて、具に自ら陳べ道いたり。使者をして単于〔匈奴の王〕に謂わしめて、言えらく天子〔昭帝〕上林〔長安の都にある宮苑の名〕中に射して、雁を得るに、足に帛書〔絹に書かれた手紙〕を係ぐ有りて、言えらく武等は某沢の中に在りと。使者大いに喜び、恵の語の如くして以て単于を譲む。単于 左右を視て驚き、漢使に謝して〔謝罪し〕曰く、武等は実に在りと(昭帝卽位、數年匈奴與漢和親。漢求武等、匈奴詭言武死。後漢使復至匈奴、常惠請其守者與俱、得夜見漢使、具自陳道。教使者謂單于、言天子射上林中、得雁、足有係帛書、言武等在某澤中。使者大喜、如惠語以讓單于。單于視左右而驚、謝漢使曰、武等實在)」と記されている。この故事を用いて、明、宗臣「元美を待つも至らず 呉峻伯と同に席上に賦す(待元美、不至。同呉峻伯席上賦)」詩では「塞上の音書 胡ぞ伝わらざる、君を遅てば明月幾ど嬋娟たり〔月の美しく輝くさま〕(塞上音書胡不傳、遲君明月幾嬋娟)」と、宴席の招待状〔塞上音書〕が届いているはずなのにどうしてまだ来ないのかと詠んでいる。**傳或詭** 前の【語釈】3「塞上音書」で『漢書』に記されるように、雁の足に括られた手紙によってもたらされた知らせとして、蘇武は生きていると匈奴の単于に詐って伝え鎌をかけたことをいう。**4空中怪字寫何奇** 「空中怪字」から連想されるのは、東晋の殷浩が戦術的失策によって地位や身分を剥奪され流罪に遭って、一日中、空に向かって「咄咄怪事〔おや、けったいな事じゃないか〕」の四文字を書いていたという故事であり、劉宋、劉義慶『世説新語』「黜免〔免職〕」に、「殷中軍〔中軍将軍の殷浩〕廃せられて〔地位身分を剥奪されて庶民となり〕信安に在り。終日恒に空に書して字を作る。揚州の吏民〔官吏と庶民〕義を尋ねて之を逐いて竊かに視れば〔その筆跡をこっそりとたどってみると〕、唯だ咄咄怪事の四字を作るのみ(殷中軍被廢在信安。終日恒書空作字。揚州吏民尋義逐之竊視、唯作咄咄怪事四字而已)」とある。もっとも月性がこの故事については、江戸時代によく読まれ、和刻本〔主に中国の書を日本で刊行したもの。訓点が付されているものもある〕も南宋、祝穆『新編古今事類全書前集』巻三十一「仕進部」「謫罰」に「書空咄咄」の項があり、「殷浩 黜けられて〔免職になって〕、談詠輟まず、家人と雖も其の流放の感〔流罪にあったという感情〕有るを見ず。但だ終日空に書して、咄咄怪事の四字を作るのみ。浩の甥韓伯随いて徙所〔流罪の地〕に至り、歳を経て〔一年が過ぎて〕都に還らんとす。浩 送りて渚の側に至り、曹顔遠〔西晋の曹攄、字が顔遠〕の詩を詠じて云えらく、富貴なれば他人も合り、

貧賤なれば親戚も離ると。因りて泣下る(殷浩被黜、談詠不輟、雖家人不見。其有流放之感。但終日書空、作咄咄怪事四字而已。浩甥韓伯隨至徙所、經歲還都。浩送至渚側、詠曹顏遠詩云、富貴他人合、貧賤親戚離。因而泣下)と記されているのからは、回りから見放されて孤独に苛まれていたことが見て取れるが、この殷浩の孤独感をひとり郷里を離れている月性の孤独感に重ねているとすれば、この書が直接の拠り所になっているようでもある。因みに今日まで残されている蔵春園の蔵書を記録した『藏春園資料目録』にも『新編古今事類全書前集』(籍番号 20-48)の書名がある。あるいはこの句は、第二句の「先後自ずから行列を成して之く(先後自成行列之)」と重複するという嫌いは大いにあるが、月性は、「怪字」を、雁が並んで飛ぶ形が、なんと大空に書かれた「一」あるいは「人」の字〔雁字〕ではないかと、その不思議さに感歎しているのであろうか。豊前の蔵春園で学友たちと共に作り合った詩が『同韻集』(恒遠俊輔氏所有、福岡県豊前市求菩提資料館に寄託)に収められており、その中の釋〔僧侶〕又新という人は「水中の雁字(水中雁字)」五首と題して水に映る雁の列を詠んで、其の三には「怪しむ他の殷浩空中の字を、写作す留侯圯上の書〔後に留候に報ぜられた漢の張良が圯橋で老人から兵法書を授かった〕(怪他殷浩空中字、写作留侯圯上書)」とあり、また同じく蔵春園の学友たちの詩を収めた『遠帆樓同社詩鈔初稿』巻之二、忍海量容にも「水中の雁字(水中雁字)」詩があり「健筆〔池に映った雁の列をみごとな字とみなしている〕池に臨みて誰か一たび揮はん〔さっと書く〕、縦横活動〔雁の動き〕神機〔霊妙〕有り。看来たれば頻りに怪しむ字に衍り多きを〔下の句の雁の列だけでなく何羽かの鷺も飛んでいて字としては誤っているという〕、幾点か兼ねて鷺影を将て飛べり(健筆臨池誰一揮、縦横活動有神機。看来頻怪字多衍、幾點兼將鷺影飛)」。後に月性が交友を持つこととなる伊勢津藩の土井聱牙(一八一八-一八八〇)の「寒夜に友を思う(寒夜思友)」詩に「翩翩として乍ち墮つ窓間の影、腸は断たる　空に横たわりて雁の字長きに(翩翩乍墮窓間影、腸斷横空鴈字長)」。

5・6昼と夕暮れの秋の情景を描写する。　**5秋江水闊**　川の水が清く漫漫と湛えられ、はるか遠くまで見渡せるこの秋の情景はよく詩に詠まれる。「三隅山荘十二勝詩　故の準奥番頭〔藩主の側近である奥番頭に準ずる職〕村田松齋翁〔村田清風〕の嘱みの為にす(三隅山荘十二勝詩　爲故準奥番頭村田松齋翁囑)」(『清狂遺稿』下 三六歳)は、詩題にも記されるように村田清風の居宅(山口県長門市三隅下)の周辺の十二の名勝を詠んだものであるが、「紫津〔青海島の静が浦〕の彩霞」詩には「沙際〔砂浜〕舟を待てば　秋水濶く、立ちて看る　孤鶩〔一羽の野鴨〕の霞と飛ぶを(沙際待舟秋水濶、立看孤鶩與霞飛)」。

天低遠　空は雲が垂れ込めてどこまでも低く見える。菅茶山(一七四八-一八二七)「夏日即事(夏日卽事)六首」其五に「天低く　遠樾〔遠くに見える樹木〕偏に雨を含み、山断たれ〔山並みが途切れるあたり〕盤鵬〔旋回する鷲〕迥かに雲に入る(天低遠樾偏含雨、山斷盤鵬迥入雲)」。　**6晩浦煙横**　夕暮れの浦に靄がたなびいている。元、黄庚「仇山村の九日の吟巻〔九月九日の重陽の節句に詠んだ詩〕に和す(和仇山村九日吟卷)」に「烟は晩浦に横たわりて蒹葭〔オギやヨシといった水草〕碧なり、霜は寒林に落ち

て橘柚〔タチバナとユズといった柑橘類〕黄なり(烟横晩浦蒹葭碧、霜落寒林橘柚黄)」。**月出遅**　靄がかかっているので待たれる月はなかなか顔を出さない。明、顧清「曲水草堂の詩(曲水草堂詩)」にも「水面 雲無ければ月出ずること早く、水面 雲生ずれば月出づること遅し(水面無雲月出早、水面雲生月出遅)」とある。**7・8**　秋の情景から焦点を雁に戻して、そぼ降る秋の夜の、旅雁の哀しい鳴き声がやはり異郷に身を置く月性の共感を呼ぶ。**7 憐爾**　……というお前〔雁〕が気の毒に思われる。「爾」は二人称の代名詞。唐、張九齢「綦母学士と同に月夜に雁を聞く(同綦母學士月夜聞鴈)」に「聯翩として(雁の飛ぶさま)倶に定まらず、憐むべし爾の郷を越ざかるの心を(聯翩俱不定、憐爾越郷心)」。**哀鳴**　悲しげに鳴く。「夢蕘草廬〔清の顧禄の編んだ庵〕の図巻に題す　前韻に畳ぬ(『清狂遺稿』上のこの詩の前に置かれている「題顧鐵卿大樹家聲巻　次其四十自壽詩韻」二首の其の一の韻字をそのまま用いる)〔題夢蕘草廬圖巻　疊前韻〕」(『清狂遺稿』上　月性十九歳)に「旅雁哀鳴して秋索莫たり〔物寂しい〕、孝烏〔年老いた親ガラスの世話をする子ガラス〕帰り宿りて月黄昏たり〔薄暗い〕(旅雁哀鳴秋索莫、孝烏歸宿月黄昏)」。**投宿**　旅人が宿に泊まるように、旅の雁がねぐらを求めること。明、王雲鳳「玉泉亭　石邦彦の韻に次す〔石邦彦が詠んだ詩の韻字と同じものを同じ順序で用いる〕(玉泉亭　次石邦彦韻)」に「日 晩山に下つ 宿に投ずる雁、煙〔靄〕 秋浦に迷う 寒を渡る鐘(日下晩山投宿雁、煙迷秋浦渡寒鐘)」。**8 白蘋**　白い花を咲かせる水草。**花老**　花が盛りを過ぎてしおれる。唐、銭起「萬兵曹〔官職名〕の廣陵に赴くを送る(送萬兵曹赴廣陵)」に「山晩れて桂花〔モクセイの花〕老い、江寒くして蘋葉〔田字草〕衰う(山晩桂花老、江寒蘋葉衰)」。**雨如絲**　細い糸のように雨が降っている。宋、李処権「雨止みて王侍郎〔官職名〕を送る(雨止送王侍郎)」に「南州〔南の地〕春老いて 雨 絲の如く、眼を刺す〔眼に触れる〕青秧〔青い苗〕 水 陂〔池〕に満つ(南州春老雨如絲、刺眼青秧水滿陂)」。